

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	近代アルバニア語における目的語句構造の研究
Author(s)	井浦, 伊知郎
Citation	ニダバ , 29 : 22 - 29
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048062">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048062</a>
Right	
Relation	



## 近代アルバニア語における 目的語句構造の研究

井 浦 伊知郎

### 0. 序 Buzukuにおける目的語句の傾向と本論文の目的

「NIDABA」28号の拙稿「16世紀アルバニア語の祈祷書における目的語句の構造について」で、現存する最も古いアルバニア語テキストである Gjon Buzukuのミサ用祈祷書（『Meshari』 1555年刊）の中で、特に目的語句を含む表現の特徴について考察した。その際、現代アルバニア語において頻繁に見られる「人称代名詞弱形による目的語の重叙」がBuzukuにあっても既に起こっていること、また現代語との異同を指摘した。それは概ね次のように整理できる。まず、現代語と明らかに異なる点として次の点があげられる；

(1) 目的語句全体の中で重叙するものの頻度が極めて低く、間接目的語の重叙（現代語においては義務的）は、依然、選択的なものに留まること。

(2) 1人称または2人称代名詞の弱形による重叙（Demiraj 1993: 210）も、例は多いものの、現代語の様に義務的に生じているわけではないこと。例えば、

(1) *U për të vërtetë juve thom se një ñ jush muo*

I for the true pl. 2. dat. say-sg. 1 that one from you sg. 1. acc.  
*të më tradhëtonjë.*

sg. 1. acc. betray-subj. sg. 3

"amen dico vobis, quia unus vestrum me tradituus est" (Mt 26:21)

「〔諸君に〕 はっきり言うておくが、あなた方のうちの一人が私を裏切ろうとしている」

一方、今日のアルバニア語にもよく見られる傾向としては次の点があげられる；

(1) 3人称代名詞の弱形による重叙は、数は少ないものの決して（従来考えられがちな様に）皆無に近い程の状態ではないこと。特に間接目的語の場合は随所にその例が見られる。

(2) *E i mujtuni Zot bekoj ata e u tha atyne*

and omnipotent God bless-aor. sg. 3 them and pl. 3. dat. say-aor. 3 pl. 3. dat.  
*kështu tue i ordhënuom... (XXVI)*

so (gerund.) pl. s. acc. order-part.

「全能なる主は〔アダムとエヴァを〕 祝福し、〔二人に〕 語って言われた」

(2)補文節全体を目的語として受けるもの、関係代名詞を目的語として受けた弱形代名詞の重叙などの例が存在すること。

(3) *si e panë se ish shkuom ñ këso jete...*

as sg. 3. acc. see-aor. pl. 3 go-plupf. sg. 3 from this life

"ut viderunt eum iam mortuum" (Jh 19:33)

「[イエスのもとに] 来てみると、既に死んでおられたので… (彼が死んだのを見て)」

(3)文脈を意識した重叙の例があること。例えば、先行する文脈で話題とされた目的語が文の前方に置かれると、それに対応する弱形代名詞が動詞直前に現れる、といった例。

(4) *Se u këtë nieri nukë e njoh.*

that I this man not sg. 3. acc. know-sg. 1

"quia non novi hominem" (Mt 26: 72)

「[ペトロは再び] 『そんな人は知らない』 [と誓って打ち消した]」

この様に、16世紀中頃のアルバニア語においても、目的語句の重叙表現に関しては既に現代アルバニア語と共通する傾向が現れ始めている。こうした特徴は、Buzukuとほぼ同時代・他地域のアルバニア語においても同様と思われる。

それではこうした目的語句構造の問題は、更に後のアルバニア語においてどう変わったのだろうか。またそれは、後のアルバニア語研究の初段階でどの様に意識されていたのだろうか。本論文では、Buzukuから約3世紀後のアルバニア人学者コスタンディン・クリストフォリジ Kostandin Kristoforidhi (1826-1895) による文法研究、併せて20世紀初頭の知識人ファン・ノーリ Fan Stylian Noli (1882-1965) のアルバニア語を考察することによって、その経過の一端を明らかにしたい。

## 1. Kristoforidhi訳聖書における目的語重叙

まず、Kristoforidhi自身が1872年に出した新約聖書（引用は Cirrincione 1968: 85）を見てみよう。Buzukuと同じ北部アルバニアのゲグ方言 (gegërisht) による<sup>11)</sup> ものだが、人称代名詞強形 *juve* が弱形 *u* で繰り返されている。

(5 a) *Me të vërtet po u thom juve se as ndë*

with the true now pl. 2. dat. say-sg. 1 pl. 2. dat. that anything at

*Israel s' kam gjetunë kaqi besë.*

not find-pf. sg. 1 such belief

"amen dico vobis non inveni tantem fidem in Israhel" (Mt 8:10)

「[諸君に] 言うておく、イスラエルの中でさえ私はこれほどの信仰を見たことがない」

同じ箇所が、Buzuku訳では次の様に書かれている。現代語では間接目的語（与格）の重叙は義務的なものである<sup>29</sup> から、こうした文は現代語ではあり得ない。

(5 b) *Për të vërtetë u juve thom se u nukë gjeta*  
for the true I pl. 2. dat. say-sg. 1 that I not find-aor. sg. 1  
*kaqë fe ñdë Israelt.*  
such religion at

(5 a) を見る限り、Kristoforidhi訳の方が今日の重叙傾向により近付いている様に見える。

もう一つ例を挙げよう。

(6 a) *U thoshte edhe dushepujvet vet.*  
pl. 3. dat. impf. sg. 3 also disciple-pl. dat. own

"altera die ad discipulos suos ait" (Lk 16:19?)

「その翌日イエスは弟子たちに言われた」

同じ箇所がBuzuku訳では(6 b)の様になっている。また(6 c)は現代語訳である。

(6 b) *Ñd atë mot tha Jezu dishipujet vet.*  
at that time say-aor. sg. 3 Jesus disciple-pl. dat. own

(6 c) *Të nesërmen Jezusi u tha nxënësve të vet.*  
at the following day Jesus pl. 3. dat. aor. sg. 3 pupil-pl. dat. own

残念ながら現時点で完全な Kristoforidhi訳聖書が手元にないので、これ以上断定的なことを言うのは難しい。しかし、ここに挙げた例文<sup>30</sup> の比較で見ると、少なくとも間接目的語（与格）の重叙という傾向については、16世紀中頃のBuzuku訳より19世紀中頃に書かれたKristoforidhi訳の方がより現代語のそれに近付いているように見える。

## 2. Kristoforidhiにおける目的語重叙の記述

Kristoforidhiは 翻訳家・文法家としてギリシアのヨアニナやアテネ、またトルコのイスタンブールやイズミルを拠点として活動した。オーストリア人 Johann Georg von Hahn による *Albanesische Studien* (1853年刊行) の執筆に協力した他、みずからも1882年にはアルバニア語の文法書（ギリシア語で解説）をイスタンブールで出版<sup>31</sup> し、また1904年には対訳辞書（アルバニア語－ギリシア語）をアテネで出版している。特に文法書の方は、当時としてはほとんど最初の本格的なものと言える。

ここでは、彼の1882年刊の文法書 *Grammatikí tis alvanikís glóssis. Katá tin toskikín dhiálekton* (Kristoforidhi 1882; 以下単に *Grammatikí*) 中の記述を幾つか



- (12) ma vrau djalënë = e vrau djalënë tim  
 1. sg. dat. +3. sg. acc. kill-aor. sg. 3 son. sg. acc. 3. sg. acc. my  
 (εφόρευσε το τέκνον μου) 「彼／彼女は私の息子を殺した」

この様に、目的語の所有主を与格弱形で示す用法は、アルバニア語に比較的古くから存在するものと考えられている (Demiraj 1993, 222–224)。従って、Grammatikíにおいて大幅にページを割いているのも不思議なことではない。

### 3. Noliにおける目的語句の傾向

本論文では、Kristoforidhiから約半世紀後のアルバニア語の例として、Fan S. Noliのテキストにも簡単に触れておこう。Noliはトルコに生まれ、ギリシアやエジプトでの生活を得てアメリカ合衆国に移住、アルバニア系アメリカ人として高等教育を受けた。1924年にはごく短期間ながら、独立直後のアルバニアの大統領を努めた。

彼は本来ギリシア正教の聖職者であったが、詩人、小説家、シェイクスピア作品などの翻訳家としても知られ、そのアルバニア語はアルバニア南部のトスク方言 (toskërisht) を基本とする (Agalliu 1999: 133ff.)。この点は、イタリアやギリシア語圏を拠点として活動した同時期の多くの知識人が用いていたアルバニア語にも共通すると思われる。

しかし Kristoforidhiの活躍時期が19世紀後半であるのに対して、Noliのそれは既に20世紀の前半期を中心とし、時期としてはアルバニア国民の文芸復興や言語統一運動の一応の完結期にある。従ってそのアルバニア語も、今日の標準語により近付いていると言える。また入手可能な作品テキストが Kristoforidhiの場合よりも多彩かつ豊富なため、近代アルバニア語の研究に適した対象の一つでもある。

Noliのアルバニア語については、ごく最近まとまった研究が公表されている (Agalliu 1999)。いくつかのテキストを見る限り、名詞句を目的語とする文における弱形人称代名詞の重叙については、現代語との傾向の差がほとんど見られない。一方、関係節 (関係代名詞は不変化詞që) や補文節を目的語とする構文においても、弱形代名詞による重叙が見られる。ここではその例を3つ示す。

(関係節内で直接目的語として用いられる場合)

- (13) gjë që nuk e dimë me shiguri...  
 thing which not sg. 3. dat. know-pl. 3 with safety  
 「我々が確実には[それを]知らないこと」 (Agalliu 1999: 130)

(関係節内で間接目的語として用いられる場合)

- (14) Aj, që s' i ishin mvrojtur sytë kur i  
 he which not sg. 3. dat. defend-pas. impf. pl. 3 eye-pl. nom. when sg. 3. dat.

binin shigjetat dhe gjylet si breshër mi supet,  
 fall-impf. pl. 3 path-pl. nom. and cannonball-pl. nom. as hail on shoulder  
 ... qan tani si çilimi.  
 cry-sg. 3 now as kid

「道を塞がれ弾丸を肩に雨あられと受け [その] 目をおおっていなかった男は…今は子供の様に泣いている」 (Agalliu 1999: 128)

(補文節を目的語として受けている場合)

(15) *Kush e besonte se kjo Shqipëri e varrosur do*  
 who sg. 3. acc. believe-impf. sg. 3 that this Albania-nom. buried will  
*të dilte nga gërmadhat e katastrofës...*  
 go out-subj. impf. 3 from ruins of catastrophe

「この死せるアルバニアが破局を脱すると誰が思うだろうか」 (Agalliu 1999: 142)

こうした現象の頻度は既にBuzukuのそれを大きく上回り、むしろ完全の現代語とほとんど同様と行ってもいいだろう。

特に興味深いのは(14)の例である。不変化詞の関係詞qëは専ら先行詞が関係節内で主語か直接目的語として機能する場合に用いられるもので、間接目的語として用いられる場合は、性・格変化を伴うi cili (Likaj 1997) で関係節を作るのが(今日でも書き言葉においては)標準的である。しかし現実の口語表現では、このように与格の機能を示すqëが現れることも決して少なくない。このNoliの例は、BuzukuやKristoforidhiには見られない用法、むしろ現代のアルバニア語に定着した用法を含んでいると言える。

#### 4. 考察

ここではGrammatikiについて考察する。その記述から目的語の重叙に関するもの(正確に言えば、多くは普通名詞でなく人称代名詞を目的語とする場合に限られているが)をごく簡単に見てきた。既に指摘した様に、目的語の重叙自体は明確に意識されているが、そうした表現が可能となる背景、とりわけ意味的な理由(前後の文脈、語順、名詞句の定・不定との関係など)については、ほとんど述べられていない。

ここでひとつ問題になるのは、そうした記述不足がそのまま当時のアルバニア語研究の水準を反映したものなのか、という点である。

目的語と代名詞による重叙表現は多くの言語で一般的な現象であることが知られている (Lyons 1999: 211f.) が、バルカン諸語においては、まずその起源をめぐる論争が1930年代に起こっている (Милетич 1937)。その後アルバニアでも、1970年代から1980年代にかけて意味論・統後論両面からの研究が進められた (Përnaska 1982他 Cipo 1952, 29

-30, 63-64)。アルバニア語に限れば、重叙表現に話者の心理が介在する可能性を具体的に指摘した研究としては、チェコで発表された論文 (Novak 1958) がおそらく最初であろう。

これらの研究の流れ (及び当時の言語学の動向) から見て、Kristoforidhiの時代、既に目的語の重叙表現が意味に関わる問題として意識されていたとは、当然のことながら考えにくい。ただ、その基本構造が「弱形人称代名詞+動詞」にあることや、与格における独自の用法などについては、その記述の必要性が充分承知されていたのではないかと考えられる。

\* 本論文は、1999年9月11日に西日本言語学会 (於 九州産業大学) で発表した原稿に加筆訂正したものである。聖書の日本語訳は新共同訳による。

## 註

(1) Kristoforidhiは1879年に、トスク方言訳による聖書も出している。

(2) 現代アルバニア語の与格 (間接目的語) は義務的に弱形で重叙される。

その理由を一般的に言うと; 与格、正確には行為の受容者 (recipient) は、有標性の階層 ("markedness" hierarchy) において他動詞の目的語である対格、或いは被動作主 (patient) より上位で (Givón 1984: 87-89) あるし、話題性の階層 (topic hierarchy) においても被動作主の上位にある (Givón 1984: 168-183)。しかも与格が示すものは殆どの場合 [+human] か [+animate] であり、これもまた話題性の階層の上位に位置する。更に [+human] や [+animate] という条件下では、スワヒリ語やルーマニア語など他の言語でも、二重目的語の構造をとることが知られている (ただし definite、或いは specific object の場合。Givón 1984: 371-372)。アルバニア語でも、本来はこうした背景で与格の重叙が行われるようになったものと思われる。

更に詳しくは拙稿「16世紀アルバニア語の祈祷書における目的語句の構造について」の註(1)を参照のこと。

(3) このような「イエスは〇〇に言われた」型の文が新約聖書に頻出するものであることに注意されたい。つまりよく使われる言い回し、定着した構造と考えられるのである。

(4) Kristoforidhiやvon Hahnのアルバニア語は、全てギリシア文字を流用したアルファベットで書かれている。ギリシア文字を使うかラテン文字を使うかは当時地域によって異なっていたが、アルバニア本国で最初にラテン文字からのアルファベット使用が提案されるのは1879年。また現在用いられているアルファベットがアルバニア語圏で正式に採用されるのは、1908年からである。



## 引用文献

- Bibla. Shkrimi Shenjt.* Ferizaj(1994) [現代アルバニア語訳聖書]  
Çabej, Eqrem(1968). *Meshari i Gjon Buzukut (1555)*. Tiranë (reprint 1987)  
Ressuli, Namik(1958). *Il Messale di Giovanni Buzuku*. Città del Vaticano

## 参考文献

- Agalliu, Fatmir(1999). *Gjuha e Nolit në veprat origjinale të tij*. Tiranë: Toena  
Buchholz, Oda&Fiedler, Wilfried (1987): *Albanische Grammatik*. Leipzig: Verlag  
Enzyklopädie  
Cipo, Kostaq(1952). *Sintaksa*. Tiranë  
Cirrincione, Angela(1968). *Sintassi albanese degli antichi scrittori*. Roma  
Demiraj, Shaban(1993). *Historische Grammatik der albanischen Sprache*. Wien  
Domi, Mahir(1995, 1997). *Gramatika e gjuhës shqipe I+II*. Tiranë  
Givón, Talmy(1984). *Syntax 1*. Amsterdam: J.Benjamins  
Hahn, Johann Georg von(1854, rpt.1981). *Albanesische Studien*, Heft II. Athen  
Kristoforidhi, Konstandi(1882) Γραμματική τῆς Ἀλβανικῆς γλώσσας. Κατὰ τὴν  
τοσκικὴν διαλέκτον. Κωνσταντινουπόλις  
Likaj, Ethem(1997). Mbi burimin dhe vlerat gramatikore të përerrave cili,  
i cili. Studime filologjike 1997/1-4, 105-110  
Lyons, Christopher(1999). *Definiteness*. Cambridge: Cambridge Univ.Press  
Noli, Fan S.(1987). *Vepra*. Tiranë  
Novák, Pavel(1958). K zdvojování předmětu v albánštině. Sborník slavistických  
prací. Praha 1958, 27-32  
Përnaska, Remzi(1982). A janë përerr "trajtat e shkurtra të përerrave vetore"  
në shqiper e sotme? Studime filologjike 1982/4, 199-211  
Përnaska, Remzi(1983). Çështje të kundrinorit në gjuhën shqipe. Studime filo-  
logjike 1983/4, 179-197  
Përnaska, Remzi(1984): Çështje të bashkëpërshtatjes ndërmjet trajtës së shkur-  
tër të përerrit vetor dhe kundrinës. Studime filologjike 1984/4, 119-125  
Përnaska, Remzi(1986): Trajatat e shkurtra të përerrave vetorë dhe gjymtyrëzimi  
aktual në gjuhën shqipe. Studime filologjike 1986/2, 101-107  
Милетић, Л.: Удвояването на обекта въ българския език не е "балканизъм".  
Списание на Българската Академия на Науките (клонъ историко-филологиченъ и  
философско-общественъ) 56(28)(1937), 1-20